

近代の美術 本館18室へようこそ！

vol.1 (2021年12月発行)

発行：東京国立博物館ボランティア 近代の美術ガイドグループ

ご挨拶

「近代の美術ガイドグループ」は、初めていらした方にもお楽しみいただけるように本館18室をご案内しています。(現在ガイドは休止中)

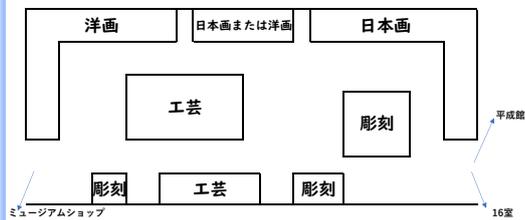
広い18室には、明治から昭和にかけての美術品—彫刻・工芸・日本画・洋画—がバラエティ豊かに展示されています。横山大観、岸田劉生、荻原守衛、上村松園等、近代美術史上で重要な作家や、教科書で見たことがある作品に出会える場所です。

海を渡った明治の美術

東京国立博物館の明治時代の作品には万国博覧会に出品された作品が数多くあることをご存じですか？万国博覧会は、1851年にロンドンで各国が参加する国際博覧会として第1回が開催され、その後、欧米で数年ごとに開催されてきました。日本は近代国家であることを発信するために積極的に参加しました。そして明治5(1872)年の文部省博覧会を創立・開館とする東京国立博物館は、万国博覧会の出品作を数多く所蔵しています。

今回は、日本が参加した重要な2つの万国博覧会と、海を渡ってそこで展示された作品を特にご紹介します。18室で作品を鑑賞する際には、万国博覧会関連作品も注目して観てくださいね。

本館18室案内図



明治6(1873)年開催のウィーン万国博覧会と日本

ウィーン万国博覧会はオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の治世25年を記念して開催されました。それまでも「江戸幕府」や「薩摩藩」「鍋島藩」として万博に出展したことはありましたが、日本としては初の公式参加になります。優れた日本の伝統技術作品を海外に紹介し、輸出増加をめざすため、参加決定後2年間かけて、出品物の収集等に取り組みました。

その結果、日本の会場には、陶器・七宝・漆器・織物などの伝統的工芸品や巨大物品として、名古屋城の「金鯱」も展示されました。さらに、展示とは別に神社を配した日本庭園を造成し、開園式を兼ねた橋の渡り初めに皇帝と皇后エリザベトの来場もあり、話題になりました。こうして、初めて日本文化を目にする欧米人を驚かそうとする試みは大成功を収め、工芸品等の輸出振興に繋がっていきました。



ウィーン万国博覧会出品作品をご紹介します



「頼光大江山入図大花瓶」(らいこうおおえやまいりずおおかびん)
明治5(1872)年 横山弥左衛門作

銅の鑄造で作られた2点1セットの花瓶です。胴の表裏4面に源頼光が大江山で酒吞童子を征伐したという「お伽話」が描かれています。また、龍や邪鬼、虎や亀、松葉や銀杏など日本の伝統的なモチーフが立体的に表現されていますので、探してみてください。

万国博覧会終了後、フランスのニール号が出品物を積んで日本へ向かい、伊豆半島沖で座礁しました。出品物の一部は引き上げられましたが、破損や海底に沈んだ作品もあります。そんな中、日本に無事に戻ってきた貴重な作品です。(展示期間 ~2022.7.10)

海を渡って来た西洋の美術

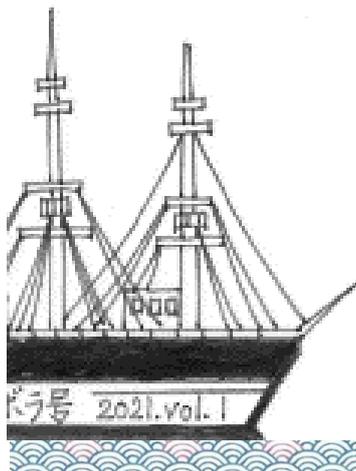


西洋から海を渡ってやって来た美術家もいます。その一人ヴィンチェンツォ・ラゲーザは、明治9(1876)年、日本に最初にできた美術学校の指導者としてイタリアから招かれ、西洋彫刻の技法を初めて日本に伝えました。

この作品には、手拭いをかぶり、たすき掛けをしたこの頃の働く日本の女性の姿が生き生きと表現されています。このような写実的な彫刻を初めて見た日本人は驚き喝采し、「精巧にしてあたかも言葉を発するがごとし」と評判になったそうです。見つめると、女性の視線が今にも私たちの方へ動いてきそうです。(展示期間2022.4.19~10.2)



「日本の婦人像」
明治14(1881)年
ヴィンチェンツォ・ラゲーザ作



※展示替えのため、展示されていない作品もあります

明治26（1893）年開催シカゴ・コロンブス万国博覧会と日本

新大陸発見400周年を記念してアメリカで開催されたのが、シカゴ・コロンブス万国博覧会です。

日本は輸出を拡大し、文明国の仲間入りをしようと周到な準備をして博覧会に臨み、会場には宇治の平等院鳳凰堂を模した日本館「鳳凰殿」や本格的な日本庭園も建設しました。また、出品作品は東京国立博物館が選定し、展示方法も当時の日本の品物をただ並べるのではなく、日本美術史の流れに沿って各時代を再現することに力点を置きました。

これまで西洋では日本の伝統的な工芸等は生活用品であるとして、「美術」と認められてきませんでしたが、初めて日本の展示品が『美術館』に飾られ、「日本の美術」が「美術」として認められた万国博覧会となったのです。



シカゴ・コロンブス万国博覧会出品作品をご紹介します



「雪中群鶏」(せっちゅうぐんけい)
明治26（1893）年 渡辺省亭筆

雪の積もった日に荷車の車輪の上や下に群れ集う鶏の様子が描かれています。視線が自然と、手前の車輪から奥へと移っていく奥行きのある空間表現が見事です。

作者の渡辺省亭は、日本画家として初めてヨーロッパに渡り、西洋の写実的な絵画表現を日本画に取り入れました。エドガー・ドガは省亭からもらった作品を生涯手もとに置いていたそうです。注目度、急上昇中の画家です。
(展示期間2021. 12. 21～2022. 1. 23)



重要文化財「鷲置物」(わしおきもの)
明治25（1892）年 鈴木長吉作

岩の上から大きく目を見開き、獲物を狙う鷲。その羽の一枚一枚、皺の入った足の肌合いまで精密に作られた青銅製の置物です。研ぎ澄まされたような鋭い爪は、必見です。

作者の鈴木長吉は、江戸時代に育まれた高度な鑄造技術を継承し、日本の技術の高さをヨーロッパの人々に広めました。
(展示期間 ~2022. 7. 10)

重要文化財「老猿」(ろうえん)
明治26（1893）年 高村光雲作

大鷲との闘いを終えたばかりの岩の上の老猿をダイナミックに表現しています。

万博会場では、ロシアの出品作品と向き合うように展示されました。ロシアの皇室の紋章が「双頭の鷲」であったため、その鷲を狙うかのように受け取られ、一層の評判を呼んだそうです。

皆さん、是非この老猿と対峙して、その迫力を感じてみてください。
(展示期間2022. 10. 4～12. 25)



重要文化財「黄釉銹絵梅樹図大瓶」(おうゆうさびえばいじゅずたいへい)
明治25（1892）年 初代宮川香山作

淡い黄色い地に白い梅の花と枝を水墨画のように表した花瓶です。下の部分は柔らかな曲線で膨らみ、口に近い部分はすぼまっている優美なシルエットです。繊細に描かれた梅の枝をたどっていくと力強く伸びた幹が現れます。

作者の初代宮川香山は、海外に向けて優れた陶磁器を盛んに作りました。工芸品が美術品として評価される道筋を作った一人です。(展示期間2022. 1. 25～4. 17)



※展示替えのため、展示されていない作品もあります

近代の美術は「黒田記念館」でもご覧いただくことができます。
この館では、明治期にフランスで西洋絵画を学んだ「近代洋画の父」黒田清輝の作品を展示しています。18室と併せて、是非お気軽にご来館ください。

